

「朝よー、忍。起きなさい」

下の階から母さんの声。ああ、今日からまた変化のない日々が始まるのか。もともとベッドから抜け出し、部屋を出る。リビングの扉を開けると、やっぱりいつもと同じ光景。母さんが朝食の準備をしていて、父さんは新聞を読んでいる。妹の静香は、これもまたいつも通り、身支度に時間がかかるから料理が食卓に揃う前からパンを頬張っている。

「あら忍、今日は早かったわね。いつもは一回呼んだだけじゃ起きないのに」

母さんは忙しそうな様子で、俺の方は見ずに言う。俺は何も言わず、食卓に着いた。

朝食をとり、身支度を整え、家を出る。昨日まで夏休みで毎日ダラダラしてたというのに、体に染みついた学校のリズムにもう戻ってしまったということが、なんだか少し悲しい。

別に学校が嫌いなわけじゃない。そりゃ授業は面倒くさいけど、友達もいるし、まあまあ楽しくやっている。でも、なんていうか――刺激が足りない。

約一か月振りに歩く学校までの道のりは、いつもより長く感じられた。足が重い。大体、何で金曜始業式なんだよ。一日行

ってまた二日休むんなら月曜からでいいじゃねえか。そんなことを考えながら歩いていると校門が見えてきて、やっと着いたと思ったところで、突然目の前で火花が散った。

「忍！ 何ボケケツと歩いてんのよ」

背後で女子の声。声の主はもう分かっている。

「痛^いってーな！ 何すんだよ！」

振り向くと同時に、俺は声の主に向かって怒鳴りつける。

「呼んでんのに気付かないのが悪いんじゃない。それに、そんなにボーツと歩いてたら危ないわよ」

その少女――都^{みやと}は全く悪びれもせず言う。

「だからってなあ、スクバで殴ることねえだろ！」

確かに刺激が足りないとは思ったけど、こういうことじゃなくて。

「あら、ごめんなさい」

都は不敵な笑みを浮かべ、校門に向かって歩いてく。黙っていればなかなかカワイイのにな、と思いながら、俺もまた歩き出した。

市川都、俺の幼馴染。小学生の頃からの腐れ縁だ。都の家は日舞の家元。都も着物を着て日舞をやっているときなんかは、大和撫子に見える。しかし本性は、大和撫子とは程遠い。さっきの行動もそうだが、結構乱暴者だ。そして、何かにつけ俺に口

やかましく言ってくる。しつかり者、とすることもできるのだろうが、正直鬱陶しいと感ずることが多々ある。

教室に入ると、やつぱり一か月前と変わらない風景だった。変化といったら——やけに日焼けしてる奴とか、イメチェンしようとしての奴がいるくらい。まあ、劇的な変化があったらそれはそれで困るけど。

既にいた友達に話しかける。休み中何してた、とか、他愛ない話。こんなのもいつも通りだよな、そう思ったときだった。

「みんな、みんな！ ビッグニュース！」

クラスのムードメーカー的存在の男子が、教室に飛び込んできた。

「何だよ、騒がしいな——」

教室の中にいたそのうちの友達が、笑いながら言う。こんなこともよくあることで、どうせ大したことじゃないんだろうな。そう思っただけながらも心のどこかでは変化を期待してるのか。俺はつい、その次の言葉待っていた。

「うちのクラス、留学生来るらしいぞ！」

言葉が終わると同時に一瞬教室中が静まり返り、その次の瞬間には反対に教室中がざわめいた。カワイイ子だったらしいなと言ってる男子、イケメンだったらしいなと言ってる女子。期待してる内容は真逆だけど、皆考へることは同じのようで、なんか笑える。俺としては——別に、男でも女でもどっちでもい

いや。留学生に、それほど興味はない。どうせ俺は大して関わりを持たないまま留学期間が終わってしまうんだろうな。記憶に残るようなことも何もないまま。別に、それでいいけど。

それからしばらくしてチャイムが鳴り、担任がやってきた。皆慌てて自分の席に着く。普段はこんなにすぐに席に着こうとしないのに。これはやつぱり留学生効果だろうか、なんて思いつながらふと隣を見て気付いた。一番後ろの列の廊下側、何もなかったはずの場所に、机と椅子が一組揃えられている。登校してきて荷物を置いたときには気付かなかった。隣の席か、なんか面倒くさいことになっちゃったな。まあしゃあないか。そんな風に思っていた。

留学生の姿を見るまでは。

「えー、もう知ってる人もいるようですが、このクラスに留学生が来ました」

S H Rが始まると早速、担任は言った。するとまた、教室中がざわめいた。それを気にせず、担任は留学生を教室に招き入れる。俺は顔を上げて——そして、時が止まったような感覚に襲われた。

腰くらいまでの長さのサラサラのブロンドヘア。肌は透き通るほどの白さで、目は碧色。背は女子としては少し高めで、モデルみたいな体型だ。そして、そして——。

ヤバイ。超カワイイ。

教室の中を見回すと、俺と同じように留学生に見惚れてる男子がたくさん。女子は女子で、めっちゃカワイくない？ などと言いつ合っている。

「今日からこのクラスで一緒に勉強することになった、リサ・ローレンツさんです。では、自己紹介をお願いします」

担任の一言で、一斉に静かになった。皆、留学生に興味津々のようなのだ。

留学生は自己紹介を始めた。その内容はきつと、このクラスの誰もが予想してなかっただろう。

「イングランドから来ました、リサ・ローレンツです。日本の文化がごつつ好きで、ほんと、もっと勉強したいと思って、留学することに決めました。ウチは、日本に来るのは初めてやし、ようわからへんこともぎょーさんあると思いますが、よろしゅうお願いいたします」

外国人とは思えないほど、流暢な日本語。それなのに何故か関西弁。しかもコテコテの。本場の関西人でもこれはおかしいのではないかというくらいだ。まだ、関西に住んできたことがあるというのなら分かる。初めて日本に来たというのに、何故。見た目が完全に西洋人だけに、ギャップがハンパない。

それも、大阪寄りだ。日本の文化が好きで勉強したんだったら、どっちかっていうと京都寄りになりそうなのに。どこから

日本語覚えてたんだろう。

その自己紹介が終わると、一瞬の間を置いて皆が一斉に笑い出した。留学生のローレンツさんは、きょとんとした顔で首をかしげている。カワイイな、ちくしょう。

「じゃあ、リサさんの席は廊下側の列の一番後ろ、足立くんの隣ね。足立くん、色々協力してあげてね」

こんな風に言われても留学生からしたら誰が足立か分からねえよな。俺は適当に返事をし、軽く手を上げる。さっきは面倒くさいって思ったけど、前言撤回。超ラッキー。

「あと、何かこの学校のことと分からないことがあったら、学級委員の市川さんに訊いてください」

担任のその言葉を受けて、今度は都がその場に立ち、会釈する。都はこのクラスの学級委員で、小学生の頃から結構名前に「委員」のつく仕事をしてる。どうやらそういう仕事が好きらしい。やりがいがある、とか言ってたしな。そんなものやりたがるなんて、俺には全く理解できないけど。

この後は簡単な連絡があり、SHRは終わった。

この状況は俺が声をかけるべきなのだろうか。いや、いきなり話しかけたら引かれるか。そんなことを思いながらローレンツさんを見ると、不意に顔を上げた彼女と視線がぶつかった。うわ、どうしよう。焦る俺に彼女は微笑みかけ、言った。

「アダチ、くん？」

「え、あ、はい！」

思いがけず、声が上がらず。なんでこういう時に限って。緊張してるのがモロバレで、めっちゃくちや恥ずかしい。

「色々迷惑かけるかもしらんけど、よろしゅうお願いします」

そして、深々としたお辞儀。自分だけ頭を上げている状況に気付き、俺も慌てて頭を下げる。

「こ、こちらこそよろしくお願いします、ローレンツさん」

肝心なところで囁む俺。ヤバイ、超カッコ悪い。

「リサでええよ。ウチも——あ、せや、ファーストネーム訊いてへんかった。なんていうん？」

ローレンツさ——あ、違う、リサは笑って、俺の顔を覗き込んで言う。俺がどぎまぎしてしまったのは言うまでもない。

ファーストネーム？ そんなカッコいいもの、俺持った覚えはないんだけど。そもそもなんだっけ、それ。えっと、確か名字がファミリーネームだったよな。あ、そうか。

「忍です。足立忍」

「シノブ？」

下の名前を呼び捨てにされ、ドキッとしてしまった。女子で俺のことを呼び捨てにするのは都くらいだから、なんか変な感じがする。

「あ、はい」

ドキドキする気持ちを抑えつつ言うと、リサは急に目を輝かせた。

「シノブはニンジャですか！？」

え？ 予想外の展開に、頭が真っ白になる。ニンジャ？ ニンジャって、あの忍者？ 時代劇とかに出てくる、あの？

その声は教室中に聞こえたらしい。話し声が止み、皆一斉にこつちを向く。なんか、変な空気だ。うわあ、なんていう巻き込み事故。何もしないのに、なんか俺まで滑ったみたいになってる。いや、リサも別にウケを狙ったわけじゃなく本気で言ってるんだらうから、滑ったって言うのもおかしいか。ってそんなこと考えてる場合じゃなくて！ どうすればいいんだ、この空気。注目されるのとか苦手なんだよ、俺。

返す言葉が見つからず、俺は黙り込む。リサはまだ、目を輝かせて俺の返事を待っている。クラスの皆は必死に笑いをこらえてるようで、その様子が余計に俺をテンパらせる。いつそ笑ってくれたらいいのに。ああもう、誰か助けてくれ！

すると突然、笑い声が静寂を破った。都だ。その声につられてか、他の人たちも皆笑い出す。都はかなりツボったようで、大きく口を開けて豪快に笑ってる。いつもだったら、もうちょっと女の子らしくおしとやかに笑えないのかよ、とか思うのだが、今日だけはマジで感謝だ。

都は気が済むまで笑ってから言った。

「自己紹介のときから思ってたけど、リサちゃんホント面白いわ。私、市川都。よろしくね！ あ、そうだ、リサって呼んでもいい？」

「うん！ ウチもミヤコって呼んでええ？」

「あはは、いいよ」

それから、二人は始業式が始まるまでの休み時間中ずつとしゃべっていた。会ったばかりだというのに、結構話に花が咲いている。俺なんか全然しゃべれなかったのに。何なんだろう、この差は。こんなところは、やっぱり流石だよなって思う。都は小さい頃から、誰とでもすぐに打ち解けられるんだ。

まあ何はともあれ、あの場を切り抜けてよかった、そう思ってたんだけど――。

「あ、忍者だ。今帰り？」

「よっ、忍者！ また明日な！」

帰り際、クラスメイトとすれ違った際にそんなようなことを言われた。こうして、俺のあだ名は「忍者」になってしまったのだった。はあ。

そのため息が聞こえたらしい。隣を歩いていたリサが、申し訳なきような顔をする。

「ゴメンな、シノブ。ウチがあんなこと言^ゆったから……」

リサは女子としては背が高いけど、俺も身長はそこそこある

ので、どうしても上目遣いになってしまふ。そんな彼女を直視できなくて、俺は思わず目をそらした。

「べ、別に気にしてないよ」

ホントは気にしてるけど。これから次のクラス替えまでずつとそのあだ名で呼ばれるのはちよつと耐えられない。でも、リサにそんな顔で謝られたらもう何でもいいか、なんて思ってしまうのもまた事実だったりする。

俺の反対側の隣では、さっきの忍者の件^{くだり}を思い出したらしい都が、またツボに入って大笑いしてる。通行人が驚いて振り返る。また注目されてる。もう、いい加減にしてくれ！

「リサ、忍者は今の日本にはいないのよ」

「ええっ！ ホンマに？」

リサはとても驚いてるけど、彼女の発言の方がびっくりだ。

「じゃあ、サムライも？ サムライも居^おれへんの？」

「残念だけど、いないわ」

都のその言葉がよっぽどショックだったらしい。目に見えてしょんぼりしている。マンガだったら、ガーンって文字が書き込まれてるだろう。

「日本に来たら絶対ニンジャに会える思ってたのに……」

「そんなに忍者好きなの？」

都が訊くと、リサは急にテンションが上がってすごい勢いでしゃべりだした。

「うん、ごつつ好き！ イングランドに居ったときにテレビで見てな、すごい思てん。走るのめっちゃ速いし、分身もできるし、何でもできんねんで！ スーパーマンみたいや！」

す、スーパーマン？ それはちよつとイメージ違う気が……。そもそも、忍者ってそんな派手なもんじゃないだろ。ヒーローみたいに困った人を救うわけでもないし。隣を見ると、都も返事に困ってるらしい。うんうん、そりやそうだよな——と思っ

ていたら、
「いや、スーパーマンというよりどつちかっていうとスパイダーマンの方が近い気がする……」

と、都は俺にしか聞こえないくらい小さな声で呟いた。まあ、言いたいことは分からないでもないけどさ。そういう問題じゃないだろ。これはツッコむべきなのだろうか。ツッコむとしたらどつちに。そんなことを考えてる間にも、リサは続ける。

「ウチの好きな言葉はな、『ギリ』『ニンジャ』や！」

え、何その取り合わせ。「義理」と「人情」の間違いなのか？ どつから覚えたんだ、そんなの。まさか、任侠ものじゃないだろうな。いや、それとも取り合わせなんか気にしてないだけなのか？ ああもう、全然分からない。

「あ、そうだ。リサ、今度家来ない？ 私の家、日舞の家元なの。着物とか、和風のもの色々あるからきつと気に入ると思うわ——って、リサ、日舞って知ってる？」

「ニチブ？」

リサは聞いたこともないようだった。

「日本舞踊のことよ。日本の伝統芸能の一つなの。着物を着て、音楽に合わせて踊るのよ。私もやってるの」

それを聞いて、リサは再び目を輝かせた。

「ミヤコはゲイシャですか！？」

今度は、俺が笑う番だった。まさか、またやるなんて。リサのその発言と俺の笑い声に、通行人の視線が都に集まる。

「い、いや、まあ、間違いではないんだけど……。でもやっぱ間違いっていうか……」

うーん、これは困るところだよな。日舞をやってるわけだから、定義としてはそう言えないこともない。別にウソをついたことにはならないのだから、そうだと言ったほうがリサは喜ぶだろう。

でも、やっぱこの状況はマズイよな。都を知ってる人はいいけど、知らない人はあらぬ誤解をしてしまうかもしれない。こうやって考えると、俺はまたマシだったな。さつきみたいに、変なあだ名をつけられるだけで済む。

リサは都の話をちゃんと聞いてないようで、大喜びしている。都はこれ以上ないくらいうろたえている。こんな都を見たのは、もしかしたら初めてかもしれない。それくらい珍しかった。

「と、とにかく、今度家おいで！ この近くにおっきい和風の

建物あるでしょ？ あそこ、私の家なの。市川って表札もあるからすぐに分かると思うわ。なんなら今日来てもいいし」

お、うまい。これで通行人の誤解は解けたかも。この辺であの家を知らない人はまずいないし。まあ、ちゃんと今のを聞いてればの話だけだな。奇妙なものを見るような目で見た後、そのまま去ってった人もいたし。

「ボンマに！ あ、でもバイトあるから行かれへんわ。今度行くな」

リサは少し残念そうに言う。

「バイトしてるの？」

「うん。生活費稼がなアカンからな。親から仕送りもしてもらってるけど、やっぱそれだけじゃ足りひんし、親に頼ってばかりなのもちよつとな」

生活費。仕送り。その言葉は、俺の中での留学のイメージとは違っていた。じゃあ、ホームステイではないのか。ということは——独り暮らし？ 同じことを都も思ったらしい。

「えっ、じゃあ独り暮らしなの？」

「うん。交換留学と違って私費留学やからな。それでも大抵はホームステイしたり寮に住んだりするみたいなんやけど、ちょうど空気が無かってん。そしたらオトンの同僚に日本人居んねんけど、その人の親戚がアパートの大家してるみたいで、たまたま空きがあつたから入れてもらってん。お金はかかるけど、ど

うしても日本に来たかったから」

リサは、何でもない事のようにサラッと言う。でもそんなこと、大変じゃないはずがない。初めて日本に来て、いきなり一人暮らし。少なくとも——俺にはできない。

「大変ね。大丈夫？」

「うん、ぼちぼちやってんねんけど、学校も始まってしもたしなあ。バイトも毎日やから大変で……」

毎日バイト。こんな高校生が、他にいるだろうか。バイトしてる奴はうちのクラスにだっているけど、毎日なんて聞いたことない。そもそも、高校生を雇ってくれる店なんてそんなになしな。

「何のバイト？」

「えっと、月水木がコンビニで、火金がファミレスのウェイトレスで、土日はマクド。まあ、土日はびっちりちゃうけどな」

うん、やっぱりマックじゃなくてマクドなんだな。そんな細かいところまで、いったいどこで覚えたんだ。この辺じゃマックって言う方が一般的だぞ。

それより、なんていうスケジュール。そんなの、俺だったら絶対続けられない。

「えっ、それ大丈夫？ ちゃんと休めてる？ ご飯とか、ちゃんと食べれてる？」

都が、母親のようなことを言う。面倒見はいい方だから珍し

いことじゃないけど、なんかおかしい。

「あまり寝られへんし、しんどいけど……でも平気。日本好きやから。日本で勉強するためなら、このくらいなんともないで」

リサは笑って言った。夕陽に照らされたその顔が、とても綺麗だった。

「……ずっと黙ってると思ったら、忍、リサに見惚れてたんだよ！」

その言葉で、はっとして我に返る。やらしいわね、と都が顔をしかめる。別に何もやらしいことしてないし何も思っていないし！ リサは笑ってた。とりあえず、キモがられなくてよかった。

「そ、そんなことより、時間大丈夫なのかよ。バイトあるんだろ？」

「あ、アカン。急がなバイト遅れてまう。ほな、また明日な！」
そう言って、リサは駆け出していった。

「いい子そうね、あの子」

都はそう言った後で、ちよつと変わってるけど、と付け加えた。確かに。変なところもあるけど、悪い子ではなさそうだ。俺は頷く。すると、話は突然予想外の方角へ飛んでった。

「ほら、やっぱいいいって思ってたんじゃない！」

都は頬を膨らませて言う。なんでそうなるんだよ。俺は慌て

て言い返す。

「いい子つてのと見惚れてたのとは別だろ！ それに俺、別にやらしいって言われるようなこと何もしてねえし！」

「見惚れてたつてのは認めるのね？」

その言葉とともに、都は急に表情を変え、意地悪っぽい笑みを俺に向ける。ああもう、これだからコイツは。でも、なんだか憎めないんだよなあ。不思議と嫌な気もしないし——って、これじゃあ俺、DMみたいじゃん！

「違う、断じて違う」

今の考えを振り切ろうと、勢いよく首を横に振る。俺はDMなんかじゃない。

「絶対ウソよ！ だってさっき言ったじゃない、見惚れてたつて！」

あれ、心の声口に出てたのか。別に、さっきの言葉の返事ではないんだけどな。訂正するのも面倒くさいし、訂正するほどのことでもないから、そのままいいや。見惚れてたつて言った覚えもないけど、まあホントのことだし、話が長引くだけだからほつとこう。

それより、さっきからなんなんだ、この会話。俺たちのことを知らない人が聞いたら、絶対カッパルの会話だと思うだろう。先に言うておくが、そんなことは一切ない。小学生の頃からずっとこんな関係だから、たまに誤解する奴とか頼んでもない

のに勝手にくつつけようとしてくる奴がいるけど、俺はコイツをそういう目で見たことは無い。今まで一度も、いや、一瞬たりとも。なんて言ったら失礼なのかな。まあ相手もそうだと思うから、別にいいか。

それからは特に変わったこともなく、中身の無い話をしながらいつも通り家に帰った。

月曜、学校に行った俺の第一声は、こうだった。

「おい、リサ！ どうしたんだよその顔！」

リサは、俺が教室に入ったときにはもうすでに来ていた。

「あ、シノブ。おはよーさん」

なんかそれ、大阪のオッサンの挨拶みたいになってるぞ。

「ああ、おはよ……。つてそうじゃなくて！ 大丈夫か？」

俺が何故こんなに心配してるか。それは、リサがすごく疲れた顔をしてたからだ。目の下にはクマが、濃くはつきりとできている。

「え、何が？」

リサは何のことか見当もつかないといった風に首をかしげる。

「何が？ じゃねえよ！ すこいクマだぞ！」

「クマ！？ どこにクマ居るん？」

すごい勢いで辺りを見回すリサ。いやいや、そうじゃないだろ。教室にクマなんかいたら、とつくに騒ぎになってる。そも

そもここ、二階だし。

「そのクマじゃなくて！」

すると、このやり取りを聞いたクラスの奴等が俺を見て笑い出す。またこれか。もういいだろ。

リサは、そのクマじゃない、という俺の言葉の意味が分からなかったらしい。日本語勉強しても、クマなんて言葉はそうそう出てこないか。でも、説明の仕方が分からない。

「おはよー」

いきなり後ろから声がして、振り向くと俺の後ろに都が立っていた。都もまた、リサの顔を見るなり同じことを言った。

「リサ、どうしたのその顔！」

「えー、別に何もしてへんよ。なんかついとる？」

どうしてそうなるんだ。普通、そんな顔になってたら鏡見たとき気づくだろ。

「リサ、昨日何時に寝た？」

そうか、そう言えばよかったのか。そしたら、さっきのマヌケなやり取りをしなくて済んだのか。

「寝てへんよ。昨日バイト午後からやったから、終わったらもう結構遅くなつてもうて。それから宿題とか予習とかしてたら外明るくなつとった。寝る時間もないからそのまま学校来てん」

と、リサがそう言ったところで、お腹が鳴る音がした。

「まさか、朝ご飯食べてこなかったとか言わないよね？」

「……あ」

ウソだろ、おい。マジか。

「大丈夫大丈夫、お弁当あるし……あ」

「そつちもかよ！ ちょっと待ってる。購買行ってくるから」

俺はリュックから財布を取り出し、教室を出た。俺はいつも昼は購買で買っている。ついだから、自分の分も買ってこよう。そしたら昼休み並ばなくて済むし。

「ゴメンな、シノブ」

教室から、リサの声が聞こえた。都の冷やかしの声も一緒に。

俺が購買で買ってきたパンを渡すと、リサはすぐに食べ出した。それも、すごい勢いで。よっぽどお腹すいてたんだな。

「リサ、無理しちゃダメよ。そんな生活してたらすぐ体壊すわ」

「無理？ 別に、無理なんかしてへんで」

そんな弱々しい声で言われても全然説得力ねえ！

「バイト減らした方がいいんじゃない？ 全部接客業だもの。」

そんな顔で接客されてもお客さんだって心配するし、店の人も迷惑よ」

「でも生活費が……」

俺もバイト減らした方がいいとは思う。でも、生活費のことを言われるとどうすることもできない。確かに独り暮らしなら色々とお金かかるだろう。それにバイトの給料だって、高校生

なら大した金額にならないはずだ。働ける時間も限られている。都も、そう言われるとこれ以上は何も言えないようで、黙り込んでしまった。どうしたらいいのか考えてるようだが、答えは出ないらしい。

バイトは減らせない。でもリサも勉強しに来てるのだから、全く勉強しないわけにもいかない。(だからといってそんなに真面目にやらなくてもいいと思うけど。俺なんか授業の予習をちゃんとしてたのは高校入って最初の一か月くらいだ。)一日の時間は限られている。学校にいる時間に関しては調整しようがない。そのほかに、家事やつたり色々……。

無茶だ、絶対！

そのとき、俺に一つの考えが浮かんだ。

「だったら、俺手伝おうか？ 家のこととか。俺なんかでよかったら」

少しでも役に立てたら。ただそれだけだったのに。

「ヤダ、忍。そんなこと言って、リサの家に上がり込むのが目的なんですよ！？」

またそれかよ、しつこいな。いい加減面倒くさくなって、俺はスルーする。

「まあ、大したことはできないけど。ちょっとくらいだったら家事もできるし」

「えっ、でもそれじゃあシノブに迷惑……」

こんな状態でも声カワイイとか反則だろ。

「俺のことは気にすんな。大丈夫だから」

「俺のことは気にすんだって。何その色男発言。超ウケるんですけど」

都が間髪入れずに言ってくる。ああもううるさい。めちゃくちゃ気になるし反論したいけど、こういうときは無視に限る。ムキになって反論したってアイツが喜ぶだけだからな。

「いや、リサが迷惑だって言うんだったらやめとくけど」

「ううん、迷惑なんて、そんなことないで！ でもええの？」

「いいから言ってるんだろ」

俺は笑ってそう言う。内心では、断られたらどうしよう、そんなことされたらちよつとイタイよな、俺、とか思ってたけど。

「じゃあ、お願いします」

こんな感じで、話がまとまりかけたときだった。

「ちよつと待ったあ！ リサ、コイツ家に上げるなんて絶対ダメよ！ 何するか分かったもんじゃないわ」

いやいや、さすがにそれは言い過ぎだろ。今まで俺にそういう節があったのかよ。少なくとも俺には、心当たりないぞ。ほら、リサも困った顔してる。どうすんだよ、これ。

「だから、私も手伝うわ。忍一人に任せてられるもんですか。

変なこと考えないとも言い切れないし」

まだそれを言うか。俺がいつ、そんな風に言われなきゃいけない

ないようなことしたって言うんだ。

「ミヤコまで……。ホンマにええの？」

「いいって、いいって。困ったときはお互い様って言うでしょ。

気にしちゃダメよ」

気にすんなって、自分も言ってるじゃねえか。さっきのは一体なんだったんだ。思わず言いそうになったが、これを言うときき都に言われたことを気にしてたってことがバレるから言わないどころ。

「ホンマ、二人ともおおきに！」

そう言って、リサはとびきりの笑顔を見せた。

そんなわけで、俺はリサの家政婦（いや、家政夫、か？）をすることになったのだった。



—— 続く